

映画時評

サボ―監督新作『対峙』（Taking Sides、2001年）によせて

盛田 常夫

オスカー賞受賞監督サボ―の前作『サンシャイン』がユダヤ人家族三代にわたる百年の歴史をテーマにしているのにたいし、『対峙』（原題 Taking Sides、ハンガリー語タイトル：Szembesites=confrontation）は連合軍が占領したベルリンを舞台に、ベルリンフィル指揮者フルトベングラーの尋問をテーマしたものだ。英国の作家ロナルド・ハーウッドの戯曲から構成されたもので、映画化が実現するまで英国やアメリカでは舞台上で上演されていた。

四カ国共同制作で原語は英語。当地ではハンガリー語の完全吹替版と原語版（ハンガリー語字幕）の二種類が上映されている。映画館によって上映版が異なるので注意。映像ではなく、尋問のやり取りがポイントだから、会話の内容が分からないと観賞不能。事前に上映プログラムをチェックして出かけた。

映画および劇場の情報は各グループの小冊子か、www.port.hu から獲得できる。多くの映画館・劇場では、オンラインによるチケット購入も可能。

あらすじ

第二次世界大戦後のベルリン。連合軍はベルリン占領と同時に、ナチに協力した戦犯認定のための尋問を始める。アメリカ軍の担当の一つに、「第三帝国」時代のベルリンフィルの役割、とくにフルトベングラーの果たした役割の検証・立件があった。これに任命されたのは、戦争前にアメリカで探偵業を営んでいたアーノルド。尋問担当の将校としてベルリンに赴任し、廃墟のなかから割り当てられた事務所を整備し、秘書と書記官を迎え、仕事を始める。

秘書の父親はナチ時代の著名な左翼活動家（シュトラウベ）。ナチの犠牲となって死去したが、その娘が戦犯尋問に適役として秘書に推薦される。尋問されるベルリンフィルの団員が、シュトラウベの名前を聞いた途端に、一様に「貴方のお父さんは優れた愛国者だった」と敬意を表する場面を何度も見せられることになる。書記官にはドイツ生まれで後にアメリカに渡ったユダヤ系の若いアメリカ兵という役回りが与えられている。アーノルドと上部機関（文化委員会）との連絡役でもある。アーノルド、秘書、書記官の三名の人間模様と、ベルリンフィルの団員およびフルトベングラーの尋問をめぐってストーリーが展開する。

映画は教会でのベルリンフィルの演奏の場から始まる。ベートーベン第五の演奏中に連合軍の空襲が始まり、演奏会は中止になる。フルトベングラーはナチの文化大臣から国外への脱出を勧められ、ドイツを去る。

そして、舞台は変って終戦直後のベルリン。アーノルドはまず、ベルリンフィルの団員の尋問から始める。ベルリンフィルはナチの文化政策に協力したのでは

ないか、団員個人もまたナチの黨員ではなかったのか。そのことを中心に尋問が進むが、当然のごとく、団員は嫌疑を否定する。アーノルドは文化省の機密資料のなかに音楽関係者の資料があることを知り、団員のほとんどがナチの秘密黨員であることを掴む。それをネタに、第二バイオリン奏者を問い詰める。この団員はオーストリア出身で、「ユダヤ人音楽家の排斥で空席ができたのでベルリンフィルに入れた。自分のような技量の音楽家にはこのチャンスを活かすほかに、ベルリンフィルのような楽団に入ることは難しかった」ことを告白する。自らの罪を軽くするために、アーノルドに情報を提供する。フルトベングラーが若きカラヤンの才能を絶賛した音楽評論家に敵意を抱いていたことを話し、フルトベングラーの愛人リストまでアーノルドに差し出す。彼はベルリンフィル団員の情報を収集する秘密諜報部員でもあったのだ。

仲間の情報を漏らした団員の苦悩は深い。一人の個人が全体主義社会のなかでどのように生きることできたのかが問われる。社会全体がファシズムに向かう中、一人の個人ができることは限られている。社会の流れに追従していくことの罪、ならば命を賭して流れに逆らうのか。ファシズムの罪はヒットラーとナチ党だけの罪なのか、それとも追従した人々も一様に負うべきものなのか。オウム真理教であれ、天皇制軍国主義であれ、問われるテーマは同じである。

こうして情報を収集したアーノルドはフルトベングラーの尋問に入る。フルトベングラーを廊下で待たせるといふ神経戦から始める。相手のイラつきを利用して、尋問での優位性を保つためだ。フルトベングラーはナチの統治期間中、ドイツに残りベルリンフィルを率いた。全国で音楽会を開き、ワーグナーやベートーベンを演奏しつづけた。1942年のヒットラー53歳の誕生日には祝賀コンサートも指揮した。アーノルドは「フルトベングラーとベルリンフィルは演奏活動を通して、ナチの文化政策、音楽政策に奉仕した」と追求する。フルトベングラーは「自らの音楽家としての信念にしたがって演奏活動を務めただけで、ナチの理念にもナチの文化政策に迎合するものではなく、音楽の価値を守るために音楽家として生きてきた」と主張する。

連合軍のソ連将校は、アーノルドにたいし、尋問をほどほどにしておけと諭す。フルトベングラーは偉大な音楽家だから、音楽家としての生命を抹殺するのは馬鹿げていると説く。必要なら別の指揮者を数人尋問対象者として引き渡すから、フルトベングラーを寄越せとも交渉する。しかし、アーノルドは拒否し、尋問の手を緩めない。アーノルド自身は音楽に興味はなく、原作では粗野なアメリカ人として描かれているようだ。この戯曲がアメリカで受けないのはその所為だとも言われている。ともあれ、アーノルドが切り札として突き出した証拠は、団員から仕入れたフルトベングラーの愛人の存在であり、機密資料から得たナチに迎合した言動や音楽評論家追放の件だった。

秘書と書記官はアーノルドのあまりに厳しさに、フルトベングラーに同情の念を抱くようになる。秘書は自分が受けたゲシュタポと同種の尋問に同席するのは耐え切れないと辞意を伝える。書記官は偉大に音楽家にたいして、もっと敬意を

もって接して欲しいと要望する。秘書は言う。「私たちも含め、当時のドイツ人は本当に何が起きているのか知らなかったのです」。アーノルドは鋭く反論する。「ユダヤ人が迫害され、何十万人もの人が殺戮されていたことを知らないとは言わせない」、と。

アーノルドの追及は厳しい。ヒットラーの誕生日に指揮をしたのはどう説明するのか。「家族が脅迫されて止む無く引き受けた」という。「そうではなく、君が指揮しないのなら、カラヤンを呼ぶと言われて嫉妬したからではないか」。「若きカラヤンを絶賛し、貴方よりはるかに才能があると論じた評論家を戦闘の前線に送らなかったか。ナチの大臣に電話して、前線に送れと」。「その彼がどうなったか知っているか。スターリングラードの闘いで亡くなったのだよ」。「君はユダヤ人音楽家を助けたといわれているが、ユダヤ人音楽家は要らないから、国外に出すようにナチの要人に働きかけただけではないのか」。「ユダヤ人は実業に向いているが、音楽に向いていないと言っていたのではないか」。「ヒットラー葬送曲として、ラジオで流されたのは貴方が指揮したブルックナー第七番のアダージオだ」。

この激しい尋問が終わり、フルトベングラーは取り乱しながら階下に向かう。秘書はフルトベングラー指揮のベートーベン交響曲第五番のレコードをかけ、建物中に響き渡るほどの音量で流す。フルトベングラーはそれを聞きながら、建物を去る。

そして、最後に「フルトベングラーの案件は別の委員会に回され、そこでナチへの協力の容疑から免罪され、戦後の音楽活動を許される。しかし、米国への入国は 1954 年に死去するまで許可されることはなかった」というナレーションが流れる。

テーマは普遍的

戯曲ではフルトベングラーはナチに抗しつつ、自らの音楽を追究した人物として肯定的に描かれているようだが、映画ではそのように単純化されておらず、美化されてもいない。その分、全体主義社会における知識人の役割というテーマを浮かび上がらせる。20 世紀を通して、国と時代を問わず、問い続けられてきた重いテーマである。

全体主義社会のなかで、人はどのように生きることが出来るのか。ナチズムが社会を覆うなかで、それから距離をとって生きることは可能だったのだろうか。音楽は政治を超える存在なのだろうか。フルトベングラーの音楽、指揮者、作曲家としての価値は、ナチ政権への迎合とは無関係に、独立した固有の価値をもつのだろうか、それとも権力に迎合した音楽や音楽活動は汚れたもので、価値が低いものなのだろうか。同じことは、他の文化活動や科学研究にも言える。全体主義社会から解放された人々は、己の過去にたいして、どのように向き合えるのだろうか。それとも、向き合えないのだろうか。「醜い過去との対峙」という視点も古くて新しいテーマである。

映画はベルリン占領時代の一コマを描いたものだが、それはけっして過ぎ去った過去の事件ではない。全体主義から解放されたドイツは、戦後、再び全体主義の罠に陥った。ナチズムと闘い、社会主義を標榜した東ドイツが構築した社会は、もう一つの全体主義社会だった。ヒットラーに代わって今度は共産党絶対政権のもと、市民が市民を監視する全体主義社会が出来上がった。いったいナチズムへの反省は何だったのだろうか。「右」の全体主義から「左」の全体主義へ移行しただけだった。結局、東ドイツはナチズムから何も学ばなかった。歴史は繰り返されるばかりなのか。

「過去との対峙」か、「過去の忘却」か

同じテーマは現代の日本で映画になるだろうか。欧州がナチズムの時代、日本は天皇制軍国主義の時代だった。軍国主義に反対する人々は「赤」（共産主義者）と呼ばれ、特別高等警察（特高）の取り締まり対象になった。特高の醜さを小説に描いた小林多喜二は、逮捕から数時間で謀殺された。人々は「お上に楯突く赤」を恐れ、「赤」を売ることによって身の証を立てた。戦後になっても、「赤」は社会に相容れない特殊な人々、集団の意思や決定に異議を唱える人々の代名詞に使われた。他方で、共産党も戦前の秘密主義的な体質を脱却することができず、欧州の共産党のような大衆的な支持を獲得することができなかった。かくように日本では「全体主義への加担」という「過去との対峙」がないまま、戦前の社会意識がそのまま継承された。日本の民主主義の底が浅い所以である。幸いにもと言うべきか、ドイツと同様に、軍の解体によって強権権力が消滅し、戦後の日本社会は非政治化と戦時社会の忘却への道を進んだ。

群れるという習性は人間を含め、動物社会に不可欠なものだ。弱い者を守る社会システムである。他方、それは強い個人を抑圧することになる。日本社会には多数に流れる全体主義的集団化への傾向が常に存在する。群れる傾向をもつ社会の中で、個人が多数と異なる意見を主張し、保持しえるだけの強さをもっているだろうか。また、日本社会は少数意見を許容するだけの度量を備えているだろうか。強い個人を排除する力は、現代の日本社会に根強く残っている。この映画の意味を理解できないほどに、日本社会はそのことに無頓着だ。

ちょうどこの映画が上映されている最中、ハンガリーでは旧共産党支配時代の秘密警察が政局の中心テーマになった。メジエシ首相が内務省諜報部員だったことを示す文書が、新聞に公開されたのだ。旧体制のエリートが今でも政権の第一線のポストを占めているというあまりにハンガリー的な矛盾した現象に、選挙に敗れはしたが大衆運動に自信をつけた FIDESZ が仕掛けた爆弾である。

ほんの少し前まで、このテーマはハンガリーでは過去のものとされていた。すでに 1989 年前後に多くの資料が廃棄されたり盗まれており、社会党も再び 1994-1998 年に政権に就いているから、残された資料からはそれほど驚くようなものが出てくるとは思われなかった。しかし、メジエシ辞任を強烈に主張していた FIDESZ 党首のポコルニの父親が 33 年にわたって諜報部員だったという事実を突

きつけられ、涙ながらにポコルニは党首を降りる決断をした。機密資料や内務省の人間関係を良く知る社会党筋から繰り出されたカウンター・ブローである。メジェシは「だから、過去を速やかに閉じて、未来に向かおう」と呼びかける。

過去から何を学ぶか

小地主党党首のトルジャンも諜報部員だったことは周知の事実である。ハンガリーでは平和的に体制移行がおこなわれたために、政治家の過去について断罪されることはなかった。しかし、国会では幾度となくこの問題が取り上げられてきた。とくに、政治家個人の問題より、政治家の父親の過去が政敵への攻撃材料として利用されてきた。皮肉なことに、反体制知識人が党の設立を担った SZDSZ で、父親が旧体制の諜報部員だった家庭的背景をもつ議員が多い。昨年、旧小地主党系議員の一人が SZDSZ のバウエル議員の父親の過去を暴露したが、これはバウエルがオルバン一家の経済的利得追求にたいする攻撃にたいする仕返しだった。著名な作家エステルハースィーの最新作でも、父親の過去がテーマになっており、ハンガリーではウェットなことに、「父と子」が独立したテーマを構成している。そして、そこにポコルニ党首の父親である。

権力を握った社会党は強気である。この諜報部員騒動の最中、ホルン前首相の誕生日に、最高位の国家勲章を授与する政府決定をおこなった。マードル大統領がこれを拒否して話題になっているが、これはマードル大統領に理がある。平和的な体制転換に貢献したとはいえ、ホルンには消しがたい過去と、前首相時代に任命した二人の副党首の経済犯罪にたいする責任がある。誕生日に勲章を贈るとするのは、昔の共産党時代丸出しの儀礼ではないか。この秘密警察騒動の最中に国家勲章を持ち出すメジェシはよほど政治感覚が鈍っているか、ホルンに頭が上がらないかのどちらかだ。それを推進し容認した社会党指導部の政治センスはいかほどのものか。

メジェシは SZDSZ から首相不信任を突きつけられたが、自らの過去を国会で釈明することと、内務省資料を公開することを条件に、首相の座に留まることになった。そして、メジェシ曰く、「資料が公開されたら、驚くような結果になる」と。つまり、「自分だけでなく、他にも多くの著名人が同じ過去をもっている」と言いたいのだ。首相の地位にある者の言葉として、あまりに貧しく悲しい。「他にもやっていた者がたくさんいるから免罪される」と考えるのは、「子供の言い訳」と同じだ。何を悔い、何を反省し、何を未来に伝えるのか。そのような志高い言葉はメジェシからは聞かれない。「ホルンに最高位の勲章を」という政府決定に、メジェシと社会党の限界を見せ付けられた。

社会党の諸氏にはまずこの映画を観てもらいたい。そして、「過去との対峙」を真剣に語ってもらいたい。